

令和6年（2024年）11月吉日

報道機関 各位

函館港イルミネーション映画祭実行委員会
実行委員長 米田 哲平

函館港イルミネーション映画祭・第28回シナリオ大賞の決定および
第30回函館港イルミネーション映画祭の開催について

時下、ますますご清栄のこととお慶び申し上げます。平素は格別のご高配を賜り、厚くお礼申し上げます。

当映画祭は、「街が丸ごと撮影所のような函館の街から、新しい函館発の映画を全国に発信しよう！」として平成7年（1995年）から活動を開始し、今年で30回目を迎えました。また、シナリオ大賞を平成8年度（1996年度）から実施しており、直近では第23回シナリオ大賞荒俣宏賞受賞作品「自宅警備員のフェアリーテイル」（上映タイトル：自宅警備員と家事妖精）」、第13回審査員奨励賞受賞作品「記憶代理人」（上映タイトル：消せない記憶）が全国上映されております。

今年は、初日の会場を函館山ロープウェイ山頂展望台クレモナホール、2日目・3日目の会場を函館市公民館とし、公式パーティーも開催いたします。

つきましては、この度本年度のシナリオ大賞の受賞作品が決定いたしましたのでお知らせいたしますとともに、来る12月6日（金）～12月8日（日）の3日間、函館山ロープウェイ山頂展望台クレモナホール、函館市公民館を会場に開催しますので、貴機関における報道方宜しくお願い申し上げます。

なお、表彰式は12月6日（金）に函館山ロープウェイ山頂展望台クレモナホール（悪天候等によりロープウェイが運休した場合は函館市公民館に会場が変更）にて行います。

問合せ先

函館港イルミネーション映画祭函館事務局
TEL 0138-22-1037

2024第30回函館港イルミネーション映画祭
第28回シナリオ大賞の結果報告

○応募総数 66作品

○最終審査決定 11月11日(月)

○審査員

荒俣宏(作家) 河井信哉(プロデューサー) 三島有紀子(映画監督)

・函館市長賞(グランプリ) 賞金100万円

タイトル 「函館家族」

受賞者 土屋 眞利(つちや まさとし) 45歳
静岡県駿東郡長泉町在住

本人プロフィール 別添のとおり

受賞作あらすじ 別添のとおり

・準グランプリ 賞金10万円

タイトル 「パンと小麦粉とひまわり」

受賞者 大島 範之(おおしま のりゆき) 64歳
東京都品川区在住

本人プロフィール 別添のとおり

受賞作あらすじ 別添のとおり

函館港イルミネーション映画祭2024
第28回シナリオ大賞応募作品

『函館家族』

土屋 誠

【登場人物】

- 小笠原和夫（58） 会社員
小笠原美佐（55） 和夫の妻
小久保重希（34） 和夫の長女
五十嵐玲香（32） 和夫の次女
小笠原梨子（24） 和夫の三女
小久保楓（11） 重希の長女
五十嵐瑛斗（えいと・9） 玲香の長男
五十嵐圭志（けいし・6） 玲香の次男
- 大西義夫（61） 和夫の親友（本当は実兄）
大野幸子（59） 義夫の内縁の妻
- 小久保陽介（36） 重希の別居中の夫
小久保絹枝（70） 陽介の母
- サル（24） ネパール人。重希の同僚
道下朋美（34） 重希の中学校の同級生
鈴木麻衣（34） 重希の中学校の同級生
鈴木大雅（たいが・12） 麻衣の長男
細田真理子（36） 和夫の担当医師
平川恵三（74） 『道南銀鈴会』代表
磯貝徹（32） 医師
月岡（50） 大阪のヤクザ

【あらすじ】

二〇二三年。

函館に暮らす小笠原家は、長女の亜希が娘の楓、次女の玲香が長男・瑛斗と次男・圭志を連れて出戻ったことで、毎日が大騒ぎ。小説家志望の三女・梨子は不満で仕方ない。

だが、父・和夫も母・美佐も表情は明るい。天涯孤独で施設育ちのふたりにとって賑やかなマイホームは大歓迎だった。

そんな小笠原家には不思議なおじさんが出入りしていた。娘や孫たちから絶大な人気を誇る『よつちゃん』こと大西義夫だ。義夫は和夫の親友で、小さなクリーニング店を営みながら自由きままに暮らしていた。

この年、和夫に喉頭がんが判明する。『声を失う』という厳しい現実に向き合った和夫はあきらめることを思いつく。

和夫は娘たちには隠していたが、天涯孤独の美佐と違い、大阪に家族があった。友人と偽っていたが、義夫は実兄なのだ。義夫のすすめで和夫は大阪時代や大西家とはきっぱり縁を切っていた。

そんな和夫がただ一つだけ縁を切れずにいたもの。『阪神タイガース』だ。

夏の大阪出張で、快勝を続けるタイガースを間近に見て、和夫はこう願う。

（たつたいちどでいい。家族と『六甲おろし』を歌いたい）

タイガースのおかげで和夫の願いは叶う。声を失った和夫だが、家族の絆を新たに強め

た。

冬が来て、新たな問題が小笠原家を襲う。長女・重希の嫁姑問題から端を発し、ついに義夫と和夫の出生を家族が知ることになったのだ。

義夫と和夫が大阪を離れ函館に来たのには理由があつた。義夫は十代の頃、酒乱だつた実の父親を殺つて死なせてしまつていた。

和夫と同じくらい『家族』の愛に飢えていた義夫。そんな義夫のせいで、溺愛する重希は離婚を余儀なくされる。義夫は自決するかのように車で電柱へ突っ込んでしまう。

一命を取り留めた義夫。

退院の日、義夫の『家族』は義夫を待つていた。

二〇二四年、春の函館。和夫と義夫が力を合わせて懸命に作つた『家族』が、そこにあつた。

【作者プロフィール】

1979年生まれ。大学卒業後、映画美学校フィクションコースへ。映画制作の全体を学び、専門を脚本とすることを決意。その後、シナリオ作家協会シナリオ講座でシナリオ作法を学び、現在に至る。

【受賞喜びの言葉】

温めていたアイデアがありました。二〇二三年の阪神タイガース日本一で、シナリオ化するお膳立ては整ったと思われたのですが、まだ何か足りない。

そんなある日、青函連絡船から函館の港に降り立つ、やせっぽちの青年ふたりが私の前に現れました。

函館市には、『映画』を大切にし、『映像化』に真剣に取り組んでくれる有名なシナリオコンクールが存在することはもちろん知っていました。

函館市について調べると、ありました。必要なものがすべてありました。興奮しました。

シナリオ『函館家族』を夢中になって書いた二〇二四年の初夏を、私は生涯忘れないでしょう。

本当にありがとうございました。



パンと小麦粉とひまわり

大島範之

【人物表】

アンナ（20） パン屋「ボルガ」の娘

森 賢一郎（24） 海軍の少尉候補生

緒方 太郎（14） ガキ大将

才谷 伊織（42） 船乗り

桃山 八重（26） 娼婦

藤田 達郎（52） 森の上官

緒方 権之介（44） 太郎の父

ベロニカ（48） アンナの母

銀行員

秘書官

子分

大男

赤い髪の娘

【あらすじ】

アンナ（20）はロシアから亡命してきたウクライナ人の娘として、函館で生まれた。日米開戦が近づく昭和16年、外国人を排斥する動きが、身边に及んでいた。

母と営むパン屋・ボルガが、ガキ大将の太郎（14）たちに攻撃された。思いを寄せている海軍の森賢一郎（24）と協力して、ピンチを乗り越えるが、太郎の父である緒方権之介（44）に逆恨みされてしまう。

ひどい仕打ちにあったアンナは、船乗りの才谷伊織（42）や娼婦の桃山八重（26）たちに「函館はいつだって、新しいものが上陸する」から、どんな衝突も乗り越えていくなしないと励まされる。

緒方が黒幕となつて、海軍では森とアンナの交際が邪魔され、ボルガの商売も行き詰まってしまう。それでも「あきらめたら函館ではない」と決め、アンナたちは慰問団を装って海軍に乗り込む。森の上官である藤田達郎

(5 2) に、国と国の間で引き裂かれた悲しみを語り、「海軍の仕事は、誰かが海に引いた線をなくすことではないか」と訴える。作戦は成功し、ボルガに客が戻り、アンナは太郎とも仲良くなる。

藤田はアンナを見直し、密命を与える。森との仲を認め、ボルガを支援する代わりに、ロシアの教会を監視し、情報をもらしている不審人物を見つけろというのだ。

アンナは、ロシアを裏切って、自分の安泰をつかむという選択が正しいのか悩み抜く。答えが出ないまま、教会を監視するが、アンナはとらわれの身となる。反ウクライナの男に襲われ、太郎の機転で窮地を脱する。

ついに日米開戦となった。森は南方戦線へ赴任となる。アンナに「必ず結婚するから、必ず生きて帰る」と誓う。アンナも安全な地を求めて旅立つことになった。どれほど戦争で傷ついても、函館は必ず輝かしい町になることを信じ、アンナは船で去っていく。

【プロフィール】

1960年、東京生まれ。大学卒業後、雑誌などで取材、編集業務に従事。人物インタビューやルポルタージュなどノンフィクション分野での取材経験が多い。シナリオ作品を愛読するあまり、脚本執筆の技術を学び始めた。

【受賞喜びの言葉】

伝統ある映画祭で、このような賞をいただくことができ、大変、光栄に感じています。以前、夜間の飛行機で函館を訪れた時、真っ暗な海峡と半島の中で、まぶしく輝いていた函館が忘れられません。先人たちは、どんな思いで明かりを見つめ、海を渡って来たのだろうか。いつか書いてみたいと思いました。賞をいただいた作品の主人公は、ウクライナから亡命した一家の娘です。いまだ世界の各地では、民族の紛争や対立が止みません。多様な人たちを受け入れながら発展してきた函館の歴史と風土に思いをはせ、書かせていただきました。

